

## 「荻窪の記憶」

こぼればなし

## 「桐の木横町」

「阿佐ヶ谷文士村」という言葉があるが、その実態は「荻窪文士村」でもある。文士の多くが、荻窪駅北口の天沼方面に住んでいたからだ。その「荻窪文士村」を象徴する場所に「桐の木横丁」がある。井伏鱒二は『荻窪風土記』に、こう書いている。

「現在の天沼三丁目二番地、三番地あたり、伊馬君のうちや太宰君たちのうちには、家主が一軒に一株ずつ桐の木の苗を植えるのが作法だとされてゐた。私は伊馬君のうちでも太宰君のうちでも桐の苗木が植えてあるのは見たことがないが、植えても枯らしたのだから程度に思っていた。ところが『桐の木横丁』といふ芝居が新宿ムーンで大当たりを取ったので、伊馬君や太宰君たちのみる横丁は桐の木横丁と言はれるやうになつた」

劇作家、作家として活躍した伊馬鶉平（春部）は、大学卒業後、天沼に住んだことから井伏と親しくなり、その勧めで昭和6年新宿に誕生した軽演劇場「ムーン・ルージュ」の芸芸部員になった。書いた台本は立てつづけにヒット。なかでも大当たりしたのが『桐の木横町』だった。

舞台は東京郊外の横町。大家さんのもつ四軒の貸家には、ニセ医者一家、学威院（学習院のもじり）の先生一家、三人のダンサー、共同生活をする若い男女が住んでいる。これといったストーリーはなく、風刺的な目で見えた横町の日常がユーモラスに描かれる。

これは、大家の奥さん、学威院の先生の家で働く女中サヨ、



ムーンルージュの「桐の木横町」の舞台  
新宿歴史博物館刊「図録 新宿の歴史と文化」より転載

ニセ医者の妻いろの立ち話。奥さんの関心は、先生の家に頻繁に届く付け届けにある。

奥さん「あのパラソル、今度またお買ひになつたの？」サヨ「いゝえ、お届け物ですの」いろ「あれが？ へえ！ どこからの？」サヨ「あれは一昨日……松屋からでしたから、たしか、大宗路さまですわ」奥さん「大宗路つて、あの伯爵の？」サヨ「ええ、貴族院の」いろ「貴族院？ ふうん……、学威院の先生つて全くいゝもんだねえ。ねえ奥さま」奥さん「さうですよ。頭の上から足の先まで貰ひ物づくめでね。あれで気がささないのが不思議ですよ」

ちなみに、「桐の木横丁」と呼ばれた小路は、荻窪駅北口前の青梅街道に面したビルの裏にあり、いまは袋小路になっている。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男